

巻頭言

服部 隆

明治以降の日本語研究を振り返るとき、江戸時代の伝統的国語研究が果たした役割は大きい。

たとえば、明治後期に日本語に即した統語論を構想した山田孝雄は、十八世紀に本居宣長が行った係り結び研究の本質を押さえたうえで研究を進めており、また昭和初期に時枝誠記が提示した言語観は、十九世紀の鈴木胤による「詞」と「テニヲハ」の分類意識をその出発点にしている。このような事例は、日本語の研究者には広く知られるところであろう。

直接的な人的交流がなくても、書物として遺された研究が後世に影響を与える。すなわち、文の分析や語の定義といった課題について、時代を越えて江戸時代の著述が読み解かれ、再解釈されていくといった研究史の展開は、たしかに日本語文法研究の受容史を、一つの系譜として捉えるうえで興味深い視点となる。

一方で、事実の連なりという視点から文法研究の歴史を語るうえで、江戸時代と明治以降の日本語研究が、幕末・明治初期において、どのような時代背景や人的関係の下で接続していったのか

についても、検討しなければ不十分である。明治前期の日本語文法研究においては、西洋文典の枠組みの中に、江戸時代の伝統的国語研究も踏まえつつ日本語をいかに落とし込んでいくかという「折衷」作業が求められた。この点については、すでに古田東朔先生が詳細な調査を行ったうえで、大槻文彦がこの作業をいかに行ったのか展望を示しているものの、接統の対象となる幕末の伝統的国語研究が、そもそも宣長や朧の研究と同質のものなのか、そして当時どのような学術的交流が行われたのかについては、いまだ不明の点も多い。

本書をまとめた遠藤佳那子さんは、これを明らかにするために、江戸時代から明治初期に至る伝統的なテニヲハ研究を、主に動詞の活用研究との関係からたどるとともに、明治以降の近代的文法研究に江戸時代のテニヲハ研究がどのような影響を与えたのかを検討している。

具体的には、研究に手薄な部分が残る幕末の伝統的テニヲハ研究について、東京大学国語研究室所蔵のテニヲハに関する著述を網羅的に調査しつつ、テニヲハ研究と活用研究との関係を、完了の助動詞「り」や用言の命令形語尾の扱いを例に再検討し、語尾とテニヲハの境界がどのように確定していったかを丹念にたどっている。

さらに、江戸時代と明治時代をつなぐ研究者として黒川真頼を取り上げ、黒川が本居春庭・東條義門の活用研究をどのように受容したかを押さえるとともに、明治期最初の学校文法とも言える大槻文彦『語法指南』が助動詞や活用形をどのように認定したかについて、黒川を含む江戸時代・明治初期のテニヲハ研究との関係から考える視点を提供している。これは、テニヲハに関するこれま

での研究史に対して、十分な新しさを持つものと言える。

もちろん、江戸時代から明治時代にかけてのテニヲハ研究を、さらに係り結び研究なども取り込みながら詳細に検討し、今後、総体として提示する必要があることはいうまでもない。しかし、資料の調査・整理、内容の吟味を通して、幕末から明治初期にかけてのテニヲハ研究の状況を示したことのみをとつても、本書は、日本語文法研究史をたどるに当たつて、必読の文献であると考ええる。日本語は、決して自然に与えられたものではない。先人達の日本語との格闘の結果として存在している。

本書を日本語と日本語研究の歴史に興味のある方々にぜひ手にとっていただきたいゆえんであり、また、遠藤佳那子さんの研究が今後ますます発展することを希望してやまない。

SAMPLE

はじめに

本書の表題『近世後期テニヲハ論の展開と活用研究』は、テニヲハ論をテニヲハの側のみではなく、活用研究の側から捉え直す、いわば「活用表から考えたテニヲハ論の歴史」という目論見による。

『古今和歌集』仮名序に「やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」とあるが、心の種から生い出た「出葉Ⅱテニヲハ」は詠歌において古くから注目されてきた。ではその「テニヲハ」とは、何を指してきたのか。本書はその外延の変遷を、活用研究の側から、特に活用表の仕組みから追究するものである。

序章にも述べるように、本書が注目する近世後期は陸続と語形変化の図表、活用表が作られた時期である。多くの近世国学者にとって活用表は学説の中核を担う存在であり、各々の著書は図表の注解書として対を成すものであると言ってよい。本居宣長の『てにをは紐鏡』に対して『詞玉緒』があり、義門の『和語説略図』に対して『語学指南』があり、黒川真頼の『詞の栞』に対して『詞

の榊打聴』がある。注解書はいずれも図表を前提として語法を説き、証歌を補う。図表に記載されない事柄は特殊な事例であり、関連項目で注記されるにとどまる。裏を返せば、骨子に関わる事例はすべて漏れなく図表に組み込まれているということであり、図表はそのようであればならない。つまり彼らの文法体系の構想は、その図表の設計と密接に関わっているのである。

しかしながら、現代の我々の目に、それらは必ずしも十全な設計ではないようにも映る。たとえば『てにをは紐鏡』では、動詞と形容詞と助動詞が混在しており、形容詞の次に過去の助動詞「き」が並ぶ。ナ行変格活用はタ行下二段活用とハ行下二段活用の並びに挿入されている。そもそも下二段活用を行うごとに逐一図表に挙げるのは重複なのではないか、一括して下二段活用を一例挙げれば済むのではないか。学校文法の活用表と照らし合わせ、こうした相違点を瑕疵として評価しかねない。

だが彼らの目指す語形変化表は、現代とは異なる範囲と尺度を持つと考えなければならない。

本邦の語学研究は、語学のための語学ではなく、他の目的のための手段として行われてきた。仏典の読解・研究のための音韻研究、キリスト教宣教のための語義・文法の研究がその例で、国学者による古語研究の目的も、古典を精確に読み、和歌を正格に詠む、というところにある。その点で、活用表は語学的な営為の結晶であると同時に、彼らの歌学、古典学の精髓でもあるのである。

たとえば宣長は、テニヲハには「本末」を「かなへあはするさだまり」（『詞玉緒』全集 一七頁）があることを発見した。これがいわゆる係り結びの法則の発見と整理の端緒である。そして次に引用

するように、世間の人々がこれ以上その法則を誤ることが無いよう、研究の成果を説いて教えるために図表を組み立て、解説書を編むのである。

世くだりては。歌にもさらぬ詞にも。このとゝのへをあやまりて。本末もてひがむるたぐひのみおほかるゆゑに。おのれ今此書をかきあらはせるは。そのさだまりをつぶさにをしへさときんとてなり。

〔詞玉緒〕全集 一七頁

先ほどの『てにをは紐鏡』の例について詳しく見れば、この図表にはテニヲハの「本末」の定格を明らかにして伝えるという目的があり、語形変化表には「末Ⅱ結び」となる述語形式、すなわち終止形・連体形・已然形のバリエーションを示すことが眼目となる。その三活用形の形式に注目して分類すれば、形容詞活用型の過去「き」が形容詞の次に配列されるのは至当である。また、ナ行変格活用 of 終止形・連体形・已然形は下二段活用型と同じく「u、uる、ule」と変化するため、ことさら両者を区別する必要は無く、これもこの配置で問題ない。

下二段活用のみならず、すべての種類の活用型を各行にわたって逐一挙例する意図も想像できよう。富士谷成章の「装図」などは比較的抽象化された簡潔な図表であるが、同時に五十音図を紹介している。それは母音交替による語形変化の規則を理解して自在に操るには五十音図の知識が不可欠となるためであり、活用表を補う役割がある。『てにをは紐鏡』では五十音図を示すかわりに、

各行の実例を示すことでこれを補ったと考えられる。たとえ五十音図に馴染んでいない初学者であつても、五十音図を確認することなく適正な語形を求めることができるわけである。

本書は、このように図表をとおして彼らの研究が成された歴史的地平に肉薄し、その射程を讀み解こうとするものである。右に述べたことは一例に過ぎず、また別の視点に立てば異なる解釈もありえるだろう。ある図表がどのような意図を以て作られ、何に對して最適化されているのかは一概に一般化できるものではなく、たとえ同じ人物の手になるものであつても個別に考える必要がある。本書ではそのいくつかの解釈を試み、特に本居春庭の活用表「四種の活の図」の枠組みが、活用論だけでなくテニヲハの範圍の設定においても重要な画期点となつたことを示した。

国学者たちの学問的背景に比して筆者はあまりに矮小であり、力及ばぬ点多くあるが、願わくは、小著に對し広く諸賢のご批評を賜わることができれば幸いである。

二〇一九年 秋

遠藤佳那子

目次

巻頭言	服部 隆 (1)
はじめに	(5)
序章	1
第一節 研究の背景と目的	1
第二節 編述の方法と「近世後期文法論関係書年表稿」	8
第三節 活用研究から考えるテニヲハ論	20
第一部 完了「り」の学説史	
第一章 完了「り」考——鈴木服まで——	31

一、はじめに	31
二、近世前期の記述	33
三、本居宣長——う行変格活用型への注目	35
四、富士谷成章——「り」の析出	37
五、鈴木胤——語尾との縮合	45
六、まとめ	48
第二章 完了「り」考——本居春庭以降	
一、はじめに	51
二、本居春庭——所属不定の活用	52
三、義門——「有」の一群	56
四、富樫広蔭——「属詞」 <small>たぐひことば</small> の枠組み	62
五、黒沢翁満——動詞の再活用	63

六、	まとめ	65	
第三章 「 自我 」再考			69
一、	はじめに	69	
二、	『二歩』における「 自我 」	71	
三、	富士谷成章の「 自我 」——「裏・表」——	76	
四、	本居宣長の「 自我 」と「こなた・かなた」	79	
五、	まとめ——渡辺実の「わがこと・ひと、こと」——	82	
第二部 命令形の学説史			
第四章 「 命令形 」考			89
一、	はじめに	89	
二、	秘伝書から宣長・成章へ	90	

三、活用研究の展開	96
四、幕末の研究——テニヲハの整理——	100
五、まとめ	106
第五章 続「命令形」考——明治前期における——	
一、はじめに	111
二、近世後期の活用表の特徴	112
三、明治前期 伝統文典	116
四、明治前期 洋式文典	125
五、大槻文彦「語法指南」の活用表	134
六、まとめ	137

第六章 「属」考——意味分類の試み——	141
一、はじめに	141
二、「属」の枠組み	144
三、文法的な特徴	147
四、表現機能の所在をめぐって	150
五、おわりに	154
第三部 八衢の系譜	
第七章 黒川真頼の活用研究と草稿「語学雑図」	159
一、はじめに	159
二、黒川真頼の国語研究の活動	160
三、資料の概要	164
四、資料の成立時期	169

五、	改変の意義	171
六、	文部省編輯寮における位置付け	173
七、	まとめ	173
第八章	黒川真頼における『詞八衢』の受容と展開	181
一、	はじめに	181
二、	特徴的記述——ラ行変格活用——	182
三、	義門『詞の道しるべ』による『詞八衢』受容	185
四、	『詞八衢』からの展開——「階」の枠組み——	190
五、	「階」の意義	192
六、	まとめ	194
終章		197

附録

おわりに	205
【附録一】東京大学国語研究室蔵黒川真頼文庫目録〈語学之部〉小型本	209
黒川文庫 小型本 調査報告	234
【附録二】黒川真頼 草稿『詞の栞』影印・翻刻（二部）	243
【附録三】黒川真頼『詞乃栞打聴』翻刻	251
参考文献一覧	305
引用文献一覧（影印、翻刻など）	312
初出一覧	313
索引	左1